［会長講演］

杏雨書屋のコレクション

小曽戸　洋
北里大学東洋医学総合研究所

武田科学振興財団杏雨書屋には諸分野にわたる和漢洋の古典籍が多数収蔵されている（現在4万余点約15万冊）．中核をなすのは医学・薬学の典籍であり，中国・朝鮮・日本の医薬典籍のコレクションとしては質量ともに日本一，いや世界一といっても過言ではなかろう．

杏雨書屋の図書の蒐集は関東大震災（1923）をきっかけに，大正末から5代目の武田長兵衞（1870～1959，和敬翁）によって創始された．当初は武田家の個人蔵であったが，昭和50年代大阪十三の地に武田家や武田薬品工業株式会社からの寄贈書をもって武田科学振興財団（1963創立）のなかに「杏雨書屋」が設立され，昭和53年4月から一般公開された．蒐集活動は現在に至るまで80年に及ぶ．

昭和7・8年頃，和敬翁は早川佐七（香邨）の蔵書を一括購入した（楂茗書屋本）．これが杏雨書屋の蒐書活動に拍車をかける契機になったといわれる．早川は東京日本橋室町の代々の漬物商．多くの植物学書を蒐集していたが，関東大震災でその大半を焼失．残余の1000余点が杏雨書屋に入った（『楂茗書屋図書目録』和漢1927，洋書1929）．

昭和10年には宍戸文庫が売立に出，杏雨書屋に入った．宍戸昌（さかり）は農商務省に勤務していた本草・博物学者．畔田翠山の自筆稿本類が含まれている（第33回特別展示会「紀州の博物学者畔田翠山」1999）．ちなみに楂茗本や宍戸本は独自の分類記号を持たず，「杏」や「研」に分散されているので，目録上からの検索は容易ではない．また市場に四散し，複数の過程を経て杏雨書屋に帰したものに名古屋の医家の平出文庫などがある（『平出氏蔵書目録』1939）．「杏」は旧来の杏雨書屋収蔵書，「研」は武田薬品工業からの寄贈図書である．杏雨書屋が財団となった昭和54年以降の新収書には「新杏」の記号が付されている．

「貴」の記号を持つ書は，武田家蔵書のなかでも特に貴重な医薬書として長年管理されていたもので，6代目武田長兵衞（1905～80）からの寄贈品である．昭和26年に神田喜一郎を介して入庫した仁和寺本『黄帝内経太素』『新修本草』，宋版『外台秘要方』．昭和35年に大安を介して入庫した弘治原本『本草品彙精要』．昭和4年頃長沢規矩也を介して入庫した宋版『備急総効方』．さらに宋版『本草衍義』，元版『聖済総録』，『経史証類大全本草』，『宋提刑洗冤集録』，明版『（魁本）袖珍方大全』，『救荒本草』，『重修政和経史証類備用本草』など，『移転記念―杏雨書屋の稀覯本』（2013）に載せられた稀覯本の多くに「貴」の記号が付いている．

昭和10年には内藤湖南（虎次郎，1866～1936）の恭仁山荘善本が杏雨書屋に入った．湖南は京大東洋史学の泰斗．国宝指定の『説文解字』『毛詩正義』『史記集解』，重文指定の『古文孝経』『春秋経伝集解』『遍照発揮性霊集』などはみな湖南の旧蔵書である（『新修恭仁山荘善本書影』1985）．

同じ年の昭和10年には小野蘭山旧蔵の本草学資料が杏雨の蔵に帰した（第39回特別展示会「小野家衆芳軒の旧蔵書籍類」2002）．

別ルートで入った対馬伊津八幡宮伝来の宋元版『磧砂版大蔵経』4962巻は，杏雨書屋の所有する木版刷仏典の白眉である．

昭和19年頃に入庫した藤浪剛一（1880～1942）の乾々斎文庫は杏雨書屋の重要なコレクションの一つである．藤浪は慶應義塾大学教授で放射線学の権威．医史学にも造詣が深く，富士川游・呉秀三らとともに医学史料の蒐集に努め，多くの業績を残し，第4代日本医史学会理事長に就任した．乾々斎文庫

のうちの曲直瀬家文書は，昭和6年に藤浪が今大路銀次郎より購入したもの．かつて「曲直瀬道三―五百年の歴史」（第46回特別展示会，2006）として特集した．本年，杏雨書屋から単行本『近世日本医療社会―曲直瀬道三・玄朔』を刊行予定である．宇田川家文書については昨年『杏雨書屋所蔵宇田川榕庵植物学資料の研究』（2014）が刊行された．『医家肖像集』（1936）の名著で知られるように藤浪は医家の肖像を熱心に集めた．近年杏雨書屋で出版した『杏雨書屋所蔵医家肖像集』（2008）の大半は藤浪の旧蔵品で，なかでも狩野永徳画による自賛の道三肖像は絶品といえる．

戦後も蒐集活動は続いた．昭和29年には佐伯理一郎（同志社病院院長・京都看護婦学校校長・京都産院院長，1862～1953）旧蔵の古医学資料が思文閣を通じて入った．杏雨書屋で「佐伯」の記号を付すものは墨跡・書簡など一点物の史料がほとんどで，書籍類は分割して市場に出たため，佐伯文庫（京都産院文庫）旧蔵書の流通経緯は複雑である．杏雨書屋には別記号「（杏」「阿」「小」ほか）に属する蔵書にそれがしばしば含まれる．『京都産院文庫図書目録』巻1（1917）巻2（1933）が参考になる．

関西における医史学の重鎮で，朝鮮医書研究で有名な三木栄（1903～92）は，戦前から朝鮮で集めた朝鮮版医書類を昭和26年に，また洋装本図書を昭和34年に杏雨書屋に譲渡した．三木は当面の研究が済むとその資料を売却し，その代価を次の資料の購入に充てるということをくり返していた．思文閣が仲介し，筆者もその一端に与ったことが何度かある．

昭和30年には中尾万三（1882～1936）の蔵書1159部5591冊が杏雨書屋に入った．中尾は東大薬学部卒の生薬学者．正倉院薬物の研究，『新修本草』の影印，敦煌本『食療本草』の研究と復元，上海自然科学研究所における生薬研究，本草の文献学的研究（『漢書芸文志より本草衍義に至る本草書目の考察』ほか）など種々の業績を残した．

昭和31年には藤田吉王所蔵の医家墨跡資料271点が入庫．

昭和36年には吐方の研究家として知られる奥村良筑（1686～1760）家伝（福井県武生市）の蔵書200余点が入庫．

昭和37年には江馬榴園（1804～90）旧蔵の蘭学関係書が入庫．

昭和39年には坂本恒雄（東大医学部教授，三楽病院院長）の医家墨跡資料が入庫．

昭和58年には関西医史学界の重鎮，阿知波五郎（1904～83）旧蔵の洋書すべて1224点，また旧蔵の和書（写本）97点，墨跡10点が入庫．

このほか，楢林家，東野家，渡辺（幸三）家，羽山家，乾家などから旧蔵書が相継いで入庫．分散しながらも種々の経緯で一部が杏雨書屋の蔵に帰したもの，例えば小島（宝素），奈須（恒徳），服部（宗賢），服部（甫庵），尾台（榕堂），富士川游，呉秀三，久保猪之吉の蔵書など挙げれば切りがない．

平成4年には武田家から新たに，武田家文書（非公開），村上家文書，洗心文庫追加分，羽田文庫等が杏雨書屋に寄贈された．羽田文庫は中央アジア研究で著名な羽田亨の旧蔵書．その敦煌文書は従来非公開であったが，最近『敦煌秘笈』10冊（2009～2013）が刊行され，世界中の注目を集めている．このうちには『新修本草』ほか医書も含まれている．

平成18年には常陸弥壮次旧蔵のエレキテル・雷関係のコレクション，常陸文庫571点が入庫した．

平成19年には京都の医史学者・杉立義一旧蔵の古医学資料など126点が入庫．一枚物がほとんどで，書籍は含まれない．

平成20年には松木明知の所蔵する医学洋書類203点が杏雨書屋に入った．その後の追加分もある（『杏雨書屋「松木文庫」解説・目録』2014）．

同年，渋江抽斎の家系文書類が子孫の佐藤家から寄贈された．後の追加分を含めて122点（第52回特別展示会「渋江抽斎資料展」2009）．

平成21年には二宮陸雄の旧蔵書268点が入庫した．

平成22年には大阪八尾の田中弥性園の旧蔵医書類700点が杏雨書屋に入った（第56回特別展示会「田中弥性園から見た近世大坂の医学」2011）.

平成23年には日本漢方医学研究所から東亜医学協会旧蔵の石原保秀文庫827点が寄贈された.

同年，小曽戸富吉・丈夫・洋の3代にわたる蒐集品1802点が杏雨書屋に入庫した.

平成24年には奥田謙蔵・藤平健の旧蔵品668点が入庫した.

平成25年には大塚敬節旧蔵の大塚修琴堂文庫2985点が杏雨書屋に入った.

平成26年には従来日本医史学会が保管してきた医家肖像画38軸が杏雨書屋に移管された．水浸・虫損によりきわめて保存状態が悪かったが，このたび修復を終えて見事に甦った.

同年，大坂華岡塾合水堂文庫329点がその子孫より杏雨書屋に譲渡された.

同年，文化庁の買い上げた福井崇蘭館旧蔵古医書の，朝鮮刊本・日本刊本（写本）計46点が杏雨書屋に依託された．中国古版本もこれに続くものとみられる.

このほか毎月開かれる運営協議会の協議によって収蔵される重要古典籍の数は増加の一方である．杏雨書屋はまさに和漢洋の医薬古典籍あるいは古医学史料の宝庫である.